

いのち恵まれて



上坂元一人

わたしは昭和八年（一九三三年）十月六日鹿児島

県北部の宮崎県境に接した栗野という町に生れた。

この町は霧島山系北端の栗野岳（標高一〇九四米）

の西麓にひろがる典型的な照葉樹林帯の中にある。

更にいえばわたしの生れ育った処は町の中心部か

ら南に約四キロ離れた隣り町に近い山奥の杉、松、

松、檜、椎などの雑木と竹林の中に埋もれたような

戸数二十数戸、住民百人ばかりの小さな集落であつた。

わがいのち恵まれし故郷にとりたてて語るほどの

ものは無いが栗野岳の裾野にある三ヶ月池という小

さな沼沢は花宮蒲自生南限地帯として国の天然記念

物に指定されている。また駅の近くには霧島山系の豊富な地下水を集めた丸池という日本名水百選に数えられる清冽な湧水池がある。

町のシンボル栗野岳は西郷隆盛がその晩年狩猟に訪れ山腹の温泉で湯治したと伝えられている。そして後に明治十年西南戦争が始まった時、西郷を盟主と仰ぐ薩軍主力部隊は勇躍この地を通過して熊本へ向った。それから七ヶ月のち戦いに敗れ賊軍の汚名をきせられ官軍に追われた薩摩兵児たちは再びこの地を経て鹿兒島へ敗走したのである。

ひとの世の有為変転をよそに物いわぬ栗野岳は今日もその翺やかな山容をみせ中腹からは長閑に白い湯煙がたちのぼっている。

こうした南国の山懐の集落で生を享けたわたしは生後二月余りのち風邪がもとで発熱し危篤に陥りながら奇跡的に一命を救われたのだときかされた。わたしが生れて六十九日目に曾祖母が亡くなった。葬

式に親類縁者が集まるというので母ははじめて産んだ男の子ということもあってわたしを小綺麗にして会葬のひとつとに見てもらおうと考えたらしい。たまたま頭にできていた瘡蓋かさたを洗って取り除いたのがいけなかったらしい。かかりつけの名医も「もう見込みはない」と匙を投げ、気の早い親戚の何人かはどうせ死んでしまうならついでだからこの子も看取って帰ろうと泊りこみを決めていたらしい。師走の寒い季節のことである。父はハイヤーで老いた名医を迎えに行き「もう一度往診して脈をとって欲しい」と懇願するとその熱意に絆はたされて「これが最後だよ」と腰をあげ往診してくれたという。「今夜が峠たけダ」と言い残して名医は解熱剤を置いて帰って行った。

母は白い粉末の解熱剤を乳首に塗りつけて祈りながらわたしの口にもってゆくけれどぐったりとしてただゼーゼー荒い息をはくばかりで乳を吸う素振りもみせなかったそうである。

何度もなんども繰り返しくりかえし薬をなめさせようと試みて真夜中になってしまったという。「今夜が峠」と医者が言い残したのは「薬をのんで熱がさがれば」という条件つきであることを誰よりよく判っていた母は諦めることなく「この子を助けられるのは私だけなのだ」と自分に言いきかせて解熱剤を塗った乳首をこれでもかこれでもかとわたしの口へもっていきつづけたという。そして真夜中すぎについに奇跡は起きた。

母に抱かれてただぐったりしてゼーゼー荒い息づかいをくり返していたわたしが突然体をビクッと動かしたのを敏感に感じとった母は咄嗟に「息を引きとった」と考えると同時にハツとして急いで乳首をわたしの口に押しこんだのだそうだ。そのときわたしは母の乳首をギューツと吸ったらしい。こうして幾日か死の淵をさまよっていたわたしのいのちは救われ甦った。

わたしが全快してお礼に訪ねた父と母に彼の老い

た名医は「ヨカッタネ！お前たちにはかなわんヨ」「この子のいのちを助けたのはわしじゃない。お前たちだよ」と一緒によるこんでくれたという。このとき慈愛と献身と苦闘をもつてわたしのいのちを救ってくれた母は二十五歳であった。

物心づいた幼年の日、同じ屋敷内に二組の祖父母のそれぞれの家と父母と一緒に住むわたしたちの家という三つの家があった。

家の祖父母には実子がなかった。そこで祖父清右衛門は自分の弟清吉の長男正を養子とした。それがわたしたちの父である。また祖母ケサノは実兄の娘——自分にとって姪を養子正の嫁に迎えた。それがわたしたちの母タカである。祖父母清右衛門・ケサノ、祖父母清吉・チエノのそれぞれの家と父母と住むわたしたちの家、ひとつ屋敷内の三棟の家が揺籃期のわたしの小天地であった。

祖父清右衛門という人は漢籍を修め本草学を学んで漢方医薬に精通し鹿児島市のふたつの漢方薬を扱った葉種問屋、梅北春天堂と坂口薬局の顧問か相談役のような仕事をしてきた。そんな経緯から孫を医者にしたという夢をもっていたようだ。わたしが生まれて間もない頃ほとんど絶望視されていた一命を救われた因縁から「この子は医者になるためにいのちをもらったのではないか」とある種の運命論的に信じこんでしまった節がある。

昭和十五年（一九四〇年）四月小学校入学を迎えた。わたしの住む集落は町から遠いため近在の四つの集落のひとつにある小さな小学校に通うことに



なっていた。全校生徒数約百五十名、授業はすべて複式授業、教職員数は校長以下教員五名用務員一名という分校に近いものだった。

医者になることを目指して勉強させようと考えていた祖父はわたしを五十キロ以上離れた鹿児島市の小学校に入学させることにした。両親には別な考えもあったのだろうが祖父の「この子を医者にするために―」という運命論的な考えと決断には抗すべくもなかったのだろう。結局わたしは祖父の關係する薬局のひとつに寄留下宿して小学校に通うことになるのである。

しかし祖父がわたしに課した医者になるための英才教育の企ては三ヶ月のち破綻する。神戸にいた叔父（母の兄）がこのことを知り「タカ、お前たちは子どもが可愛想だと思わないのか」と強く窘められたことから夏休み前には田舎の小学校に転校させられた。

鹿児島市のM小学校での想い出は担任の先生が宮

崎先生という面砲顔のやさしい女の先生だったことと下宿のおばさんが遠足には日の丸べんとうを作ってくれりと前宣伝よろしく言うので訳がわからないまま楽しみにしていて遠足の当日弁当箱を開けてビックリ大きな梅干ひとつだったことは妙に記憶に残っている。想えば小学校にはいつてはじめての遠足だというのでその幾日か前に母がキャラメルや菓子を届けてくれたのだった。わたしは浅はかにも遠足には日の丸べんとうがあるからと早合点してキャラメルや菓子も遠足にでかける前に食べてしまっていたのである。

田舎の小学校にはいったが同じ集落に同級生は女の子ひとりしかいなかった。集落が違うだけでそれぞれの出身者はまるで別世界の人間のように遠い存在だったように思う。

二年生の冬、大東亜戦争（第二次世界対戦）がはじまりその翌年父が応召して出征して行った。父が



帰ってきたのはわたしが六年生になり戦争の終わった昭和二十年（一九四五年）の夏だった。中国大陸を転戦していた父はカリエスを病んで内地送還され、小倉陸軍病院を経て終戦のとき熊本陸軍病院に入院中だったから鹿児島島の自宅にさしたる困難もなく無事に辿りつくことができたという。父はこのとき三十四歳、あとで聞いたことだが父は病気のため中国から日本に送還されたために生きて終戦を迎えることができたけれど元気で中国の部隊に残っていた戦友たちはそのうち沖繩戦線に投入されて玉碎したのだという。人の運命のはかり難さを痛感させられる話である。

父の帰りを待ちわびていた祖父が父の顔を見ると

まるで緊張の糸が切れたように体調をくずし十一月十六日あつけなく世を去った。

祖父が亡くなって翌年中学受験を控えていたわたしはどこかでホツとした。わたしはしばらく前から自分は医者には向かないし医者にはなりたくないと思いはじめていた。いつかそのことを祖父に告げなければならぬしそのことでどれほど祖父を失望させるかを思うとともに辛い気持になるのだった。祖父は漢籍に親しまれただけに謹厳実直の人であった。その祖父が最後にのぞんで行った湯治場から歩行がままならず手作りの駕籠で担がれ帰宅した情景とその横に小柄で物静かな祖母がそとつき従っていた姿が今でも目に浮ぶ。敗戦という勇気がなかったのか自虐的すぎると判断したのか終戦という表現で総括された日本の歴史の一大転換期にわたしは旧制中学最後の生徒として県立中学に入学することになる。昭和二十一年（一九四六年）四月のことである。

人間にとってその成長に従いその行動圏が拡大してゆくのは自己という中心点のまわりに樹木の年輪のように同心円を描き加えてゆくようなものである。

受験に合格して中学生になった。しかし学校は空襲で校舎が全焼しているため本校代用校舎には全生徒を収容しきれず地域別の二つの分校に振り分けられて授業をうけることになった。わたしは割り当てられた分校のひとつに二年間通学した。自宅から駅まで片道約四キロの山道を歩いて毎日通学した。分校は汽車でひと駅、距離にすれば六・三キロの隣り駅であり、着いた駅から徒歩で二キロの昔の青年学校だった。三年生になると本校の校舎が再建され分校から本校に合流することになった。二年間刻んだわたしの小さな同心円は完結した。本校への通学は汽車通学に変りはなかったが通学距離三十二キロ所要時間一時間三十分と長くなった。

昭和二十三、四年当時鉄道も資材、燃料共に不足

していて時間も遅れがちで不正確なうえに車両も貨物車両だったりひどいときには材木運搬用の無蓋車だったりした。しかしこうした未知の環境の中で細やかながら前より少し大きくなったしの同心円は刻まれていった。旧制中学三年生を卒業すると自動的に新制高校一年に編入された。わたしはこうして四年間を本校に汽車通学して高校を卒業することになったのだが分校での二年間を予備的な馴化期間として一人の山の子は少しづつ町風の雰囲気になれ、新しい友と交わり知識への欲求を刺激する師との出会いに恵まれて外の世界に眼が開けていったのである。四年間通学した本校所在の町とそこで出会う師友、往復通学途中の見聞によってわたしという小さき一人の人間の身と心の旅だちが始まったのである。汽車通学往復四時間の読書は実に豊かな空想と思念の味わい深い恵みの時をわたしに与えてくれた。人の世の生きざまに想いを馳せては荒寥たる知性の原野にはたまた雨けぶる感性の樹林いづれにわがいのち

の住処すまかを尋ねるべきかを自らに問うた日夜もついに見果てぬ夢の彼方となった。

後年わたしは「吾以外皆吾師也」という言辭に出会ったとき顧みてこの年若かりし日の自らを懐かしくまた切なく想いかえした。この小さきわたしを慈いづしみ愛し育みくられし今はなき祖父母たちと父と母、知恵深き家郷のひとびと師と友と血をわけし弟たちと姉妹たちこのいづれにも心からなる感謝を捧げるものである。そして山川草木わたしの身の廻りに存るほどのすべてのものひとつとしてわが師ならざるものはないとわたしは想うのである。

(アジア文化交流協会)